

大阪府教育委員会教育長 様

香ヶ丘リベルテ 高等学校
校長 重山 香苗

平成25年度 学校経営推進費 評価報告書 (1年目)

標記について、下記のとおり提出します。

1. 事業計画の概要

実施課程名	全日制
取り組む課題	生徒の学力の充実
評価指標	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪教育大学柳本数学研究室監修：つまずき調査による生徒の数学理解度の向上 ・基礎学力の定着度を測る校内数学検定と、学力向上を目指す日本数学検定協会の数学検定の昇級者数の増加 ・寺小屋において、数学に対する動機づけの向上
計画名	数学「つまずきゼロプロジェクト」を軸とした取り組み

2. 事業目標及び本年度の取組み

学校経営計画の 中期的目標	本校生の数学力向上を目指し、3年間を通して数学教授法の研究開発をアンダンテコース生・「寺小屋」参加生徒を対象に行い、本事業終了次年度には、蓄積されたノウハウを全校生対象に広げて実施し、さらなる数学教育の充実を図る
事業目標	<ul style="list-style-type: none"> ・「つまずき調査」(分析協力：大阪教育大学 柳本朋子)による生徒の数学理解度の向上 ・毎年の調査において、生徒のつまずき度合いの把握と学力の向上度を測る ・基礎学力の定着度を測る校内数学検定と、学力向上を目指す日本数学検定協会の数学検定における昇級 ・本校独自の数学問題集を活用して、基礎学力の定着をはかる。数学検定への受験・昇級を目指す生徒の育成 ・自分専用問題集の完成 ・自分のつまずきを自ら気付く、学び、克服する「自学」の取り組みを促進する ・寺小屋において、数学に対する動機づけ ・さまざまなイベントを開催し、数学の楽しさを気付く機会にしておく ・アンダンテコース・寺小屋参加生徒での研究の後、3年後には全校生徒に向けての取り組みと発展させる
整備した 設備・物品	校内数学検定問題集印刷(1200冊)・自分専用問題集原稿作成(版下)(300枚)、生き生き数学印刷(1200冊)各種問題集用ファイル(300部)、書画カメラ2台、プロジェクター2台、スクリーン2台、パソコン2台、プリンタ1台、数学ソフト3本、数学関連教具一式、暗線入りグリーンステール(黒板)貼替え40教室
取組みの 主担・実施者	主 担：つまずきゼロプロジェクト委員会(校長(委員長)・副校長・教頭・数学科主任) 実施者：数学科全教員・他教科コラボレーション教員
本年度の 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ・校内数学検定→日本数学検定協会の数学検定による学力向上→3級合格者2名(1次のみ合格1名) ・自分専用問題集① ・公開授業にて、機器の使用における活性化(数学科教員間で実施)→数学科全教員実施 ・寺小屋(月2回実施)イベント(年3回実施)の活性化 →寺小屋(全7回実施)、イベント：フリーハンド王、ハノイの塔選手権、実施 ・数学科研修合宿(7月下旬実施)→中間総括 チャレンジテスト(2年生2学期実施) ・プレテスト(2学期実施) →定期考査のクラス平均が80点を越えた(1学期に比べ、平均点が約10点上がった)
成果の検証方法 と評価指標	<ul style="list-style-type: none"> ・つまずきゼロプロジェクト つまずき調査②(分析協力：大阪教育大学 柳本朋子)にて現状把握 ・つまずき調査①の結果より、本校生徒は「数学がわからない・できない生徒(Aグループ)」「数学がわかりかけている生徒(Bグループ)」「数学がわかっている生徒(Cグループ)」に区分することができ、本校生徒数を100とするときおおよそAグループは30%、Bグループは50%、Cグループは20%となっていることがわかった ・初年度はAグループの10%をBグループに、Bグループの10%をCグループに移行することを評価指標とする ・数学科研修合宿(7月下旬)→中間総括・つまずきゼロプロジェクト委員会・数学全教員による検証と分析(2月) ・「高等学校・大阪市立大学連携数学協議会(通称：連数協)」等、数学教授法研究団体への実践経過の報告と検証
自己評価	<ul style="list-style-type: none"> ・校内数学検定→日本数学検定協会の数学検定による学力向上においては、Cグループの生徒の意欲の向上と、学力向上に反映させることができた。◎ ・自分専用問題集作成。○ ・公開授業・寺小屋においては、機器における活性化が課題である。○ ・1年アンダンテコースについては、プレテストなど実施において、Bグループの10%近くをCグループに移行させることができた。◎ ・チャレンジテストについては、生徒1人1人に教師の目の前で問題を解答させることにより、その生徒のつまずきにより正確に細かく分かるようになり、援助の方針が立てやすくなった。(Bグループの10%近くをCグループに移行させることができ、なおかつAグループの生徒への援助が手厚く、具体的にできるようになった)◎
次年度に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・つまずきゼロプロジェクト つまずき調査③(分析協力：大阪教育大学 柳本朋子)にて現状把握 ・上記、Aグループの25%をBグループに、Bグループの25%をCグループに移行することを評価指標とする ・数学科研修合宿(7月下旬)→中間総括・つまずきゼロプロジェクト委員会・数学全教員による検証と分析(2月) ・「高等学校・大阪市立大学連携数学協議会(通称：連数協)」等、数学教授法研究団体への実践経過の報告と検証

大阪府教育委員会教育長 様

香ヶ丘リベルテ 高等学校
校長 重山 香苗

学校経営推進費 評価報告書(2年目)

標記について、下記のとおり提出します。

1. 事業計画の概要

実施課程名	全日制
取り組む課題	生徒の学力の充実
評価指標	・大阪教育大学柳本数学研究室監修：つまずき調査による生徒の数学理解度の向上 ・基礎学力の定着度を測る校内数学検定と、学力向上を目指す日本数学検定協会の数学検定の昇級者数の増加 ・寺小屋において、数学に対する動機づけの向上
計画名	数学「つまずきゼロプロジェクト」を軸とした取り組み

2. 事業目標及び本年度の取組み

学校経営計画の 中期的目標	本校生の数学力向上を目指し、3年間を通して数学教授法の研究開発をアンダンテコース生・「寺小屋」参加生徒を対象に行い、本事業終了次年度には、蓄積されたノウハウを全校生対象に広げて実施し、さらなる数学教育の充実を図る
事業目標	<ul style="list-style-type: none"> ・「つまずき調査」(分析協力：大阪教育大学 柳本朋子)による生徒の数学理解度の向上 毎年の調査において、生徒のつまずき度合いの把握と学力の向上度を測る ・基礎学力の定着度を測る校内数学検定と、学力向上を目指す日本数学検定協会の数学検定における昇級 本校独自の数学問題集を活用して、基礎学力の定着をはかる。数学検定への受験・昇級を目指す生徒の育成 ・自分専用問題集の完成 自分のつまずきを自ら気付き、学び、克服する「自学」の取り組みを促進する ・寺小屋において、数学に対する動機づけ さまざまなイベントを開催し、数学の楽しさを気付く機会にしていく ・アンダンテコース・寺小屋参加生徒での研究の後、3年後には全校生徒に向けての取り組みと発展させる
整備した 設備・物品	校内数学検定問題集印刷(1200冊)・自分専用問題集原稿作成(版下)(300枚)、生き生き数学印刷(1200冊) 各種問題集用ファイル(300部)、書画カメラ2台、プロジェクター2台、スクリーン2台、パソコン2台、 プリンタ1台、数学ソフト3本、数学関連教具一式、暗線入りグリーンステール(黒板)貼替え40教室
取組みの 主担・実施者	主 担：つまずきゼロプロジェクト委員会(校長(委員長)・副校長・教頭・数学科主任) 実施者：数学科全教員・他教科コラボレーション教員
本年度の 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ・校内数学検定→日本数学検定協会の数学検定による学力向上 ・自分専用問題集② ・公開授業にて、機器の使用における活性化(数学科教員間で実施)→数学科全教員実施 ・寺小屋(12回実施)イベント(年3回実施)の活性化 →寺小屋(全6回実施)、イベント：フリーハンド王、(パワーポイントを利用した)消費税講座、実施 ・数学科研修合宿(7月下旬実施)→数学科全教員の意識統一 ・0限目、7限目授業(2年全学期実施)→Aグループの生徒の意欲向上に大いに繋がった ・チャレンジテスト(全学年全学期実施)→一定の成果は得られたが、授業時間数とのバランスが問題となった ・プレテスト(全学期実施)→一定の成果は得られた
成果の検証方法 と評価指標	<ul style="list-style-type: none"> ・つまずきゼロプロジェクト つまずき調査③(分析協力：大阪教育大学 柳本朋子)にて現状把握 ・Aグループの25%をBグループに、Bグループの25%をCグループに移行することを評価指標とする ・数学科研修合宿(7月下旬)→中間総括・つまずきゼロプロジェクト委員会・数学科全教員による検証と分析(2月) ・「高等学校・大阪市立大学連携数学協議会(通称：連数協)」等、数学教授法研究団体への実践経過の報告と検証
自己評価	<ul style="list-style-type: none"> ・校内数学検定→日本数学検定協会の数学検定による学力向上においては昨年度ほどの成果は得られなかった。△ ・自分専用問題集作成。(作成時間の確保ができなかった)△ ・公開授業・寺小屋においては、機器における活性化が課題である。 (準備にかかる時間・セッティングにかかる時間含む)○ ・1年アンダンテコースについては、プレテストなど実施において、Aグループの10%近くをBグループに移行させることができた。(教員の人員不足の為、思うように指導することができなかった)△ ・0限目、7限目授業は、寺小屋に参加できない生徒が、自主的に登校、居残りをし、授業で理解しきれなかった部分を補うために行なった取り組みであり、Aグループの生徒が気兼ねなく質問ができる状況で、意欲向上に繋がった。◎ ・チャレンジテストについては、昨年と同様、生徒1人1人に教師の目の前で問題を解答させることにより、その生徒のつまずきがより正確に細かく分かるようになり、援助の方針が立てやすくなった。(Bグループの10%近くをCグループに移行させることができ、なおかつAグループの生徒への援助が手厚く、具体的にできるようになった)◎
次年度に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・つまずきゼロプロジェクト つまずき調査④(分析協力：大阪教育大学 柳本朋子)にて現状把握 ・Aグループの50%をBグループに、Bグループの50%をCグループに移行することを評価指標とする ・数学科研修合宿(7月下旬)→全体総括・つまずきゼロプロジェクト委員会・数学科全教員による検証と分析(2月) ・「高等学校・大阪市立大学連携数学協議会(通称：連数協)」等、数学教授法研究団体への実践経過の報告と検証